

2022年12月1日 園内研修 ふりかえり
対話者：松木健一氏（福井大学）
エジプト教育関係者 40名参観

研修の趣旨と目的

- 1 | わたしたちはどうありたいのか、そしてその先をどう創っていくのか、
について、これまでの園の歴史、ここ30年ほどを振り返り、そこで何を
感じ考えたのかを職員が言葉にすることで、過去、現在、そして未来の
時間的な広がりの中で、そこを貫くこの園のアイデンティティをそれぞ
れの職員が掴んでいく研修にしたい。

対話内容 抜粋

語る言葉を固定化させず、感じ取っていくこと

- ・西村先生の「遊び」を真面目に真面目な言葉で語ると
その意味が失われるという言葉が響く。何度話しても
堂々巡りで答えはでない。その先が必要だ。
そこから何を見出そうとしているのか。
私たちの保育の在り方まで問い直す必要があった。
- ・時代が変わると、言葉は逆のイメージをもつこともある。
言葉を固定すると難しい。

「カリキュラムはつくったその時から捨てていく」

- ・「カリキュラムはつくったその時から捨てていく」
この言葉こそ、いまの私たちだろう。教育目標がある。
でもそれはものさしではない。その意味を常に問い続けている。
そこを見つめながら、その意味を実践を通した言葉で語り続けている。
語るための土台になったD.D.があった。
語る身体をもち、自分の直感で進めた実践の意味を日々問い、
そこからまれる「わたしの在り方」を見つめ、
それをまた語り直す会議や研修によって
園の文化そのものの再構築を常にしようとしている。
流動的で複雑な実践を、その場でとどめずずっと動かし続けていることこそ、
学び続ける組織であるということだろう。

- ・松木先生が、言葉を禁句にするのではなく、どういう思いを込めようとして
いくのか、感じ取っていくこととお話されていました。
園では日頃から、一つの言葉の概念、捉えについて対話を通して問い直してきました。
カリキュラムへの反映や園の保育理念など、そこから見出されてきたことも多かった一方で、
最近はこの言葉で表現していいのかという言葉への不安感をもつことも多くなったように思います。
私自身も子どもの言葉をどのように捉えるのか、どのように問うのか、
実践をどのような言葉で表現するかで立ち止まることが多くなりました。
「対話」という言葉一つでも、校種や教育観によって捉えは異なり、本質を相手に伝える
難しさを日々実感しています。
もちろん言葉を流さないことも大切ですが、それ自体が時代や流行によって変化するもので
あることを踏まえながら、言葉を使うことを恐れるのではなく、
その背景にどのような思いを込めているのか、その意図や意味を語ることができる
自身のスタンスと、互いに問うことができる関係性が求められると思いました。